

こんなときには・・・

Q どうしたら学校からの連絡事項が、きちんと保護者に伝わりますか？

A 子どもよりも保護者の方が日本語の習得が遅れている場合が多く、学校から渡される書類のうちどれが大切なものがなかなか判断できません。
重要な連絡事項は、1.家庭訪問をして伝える、2.一目でわかるよう印を付ける、3.子どもに声をかける、4. 電話で連絡 など、ひと手間かけると伝わりやすいです。

Q 算数・数学の問題で、答えは合っていますが解き方が違うようです。どうしたらよいですか？

A 特に算数・数学については、国によって計算の仕方や理論の立て方が大きく違います。
たとえば、計算の繰り上がり・繰り下がりや割り算の筆算の仕方、分数の読み方(分子から読むところがほとんどです)などが挙げられます。また、九九の言い方は日本独特ですので、言えなくても、既に他のところで習得している子どもはそのままにしておいたほうが、混乱を招かずに済みます。答えが合っていたら○をあげるようにしてください。

Q 高校進学への対応はどうすればよいのでしょうか？

A 保護者は高校について全く知らない場合がほとんどですので、保護者と子どもに詳しく説明する必要があります。外国につながる生徒を対象にした「高校進学ガイダンス」(県教委共催の説明会)に参加したり地域の学習支援教室と連携することも有効です。説明の際には、奨学金制度や諸費用の減免制度についての情報も伝えることが重要です。

Q 来日から数年たっても勉強の理解がなかなか進みません。言葉の問題だけではないのでしょうか？

A 学習の理解が思うように進まない場合には、次のことが考えられます。
まず、日本語の理解が不十分なことから来る理解の遅れです。この場合は、日本語の学習をもっとしっかりやる必要があります。
次に、発達障害、あるいは学習障害による可能性です。日々の生活を見て障害が疑われる場合は、速やかに親に説明し、しかるべき教育機関と連絡を取りながら適切に対応してください。実際に、障害がある子どもは稀ではありません。
もう一つは、親子や家庭の問題など、精神的な問題を抱えている場合があります。

その他の相談先

<外国人教育相談窓口常設機関>

公益財団法人 横浜市国際交流協会内
YOKE情報相談コーナー
TEL. 222-1209 FAX. 222-1187

(財)かながわ国際交流財団
多文化共生・NGO 協働推進センター
TEL. 620-0011 FAX. 620-0025

発行 つづきMYプラザ(都筑多文化・青少年交流プラザ)
〒224-0003 都筑区中川中央1-25-1 ノースポートモール5F e-mail: my-plaza@tsuzuki-koryu.org
発行日 平成22年5月
編集 つづきMYプラザ 館長 林田育美、ネットワーク1・2・3 田崎ひとみ、ボランティア 卜部弥生

都筑区内小中学校教職員のみなさんへ

外国につながる子どもとともに

～考えるためのヒント～



外国につながる子どもへの対応に困ったら・・・

つづきMYプラザ(都筑多文化・青少年交流プラザ)

TEL. 045-914-7171 FAX. 045-914-7172

通訳ボランティアの派遣(転入手続きや保護者への対応など)
日本語学習支援についての相談ができます。

つづきMYプラザ
TSUZUKI MULTICULTURAL & YOUTH PLAZA

外国につながる子どもを理解するために

・・・子どもの中でこんな事が起きている

～「外国につながる子ども」とは～

「外国籍」「二重国籍」「日本国籍取得者」などの状況にある子どもを言います。

1. 子どもにとって「学校は日本」・「家庭は別の国」

外国につながる子どもを理解するには、まず「子どもたちは毎日、外国と日本を行き来している」と思ってください。学校に行くことは、「家庭内の母文化」に、もう一つ「日本文化」を足していくことです。子どもは「日本文化」を足していく過程を学校で学び、やがて2つの文化の架け橋となります。

2. 保護者にとって日本の学校は未知の場所です

保護者は多くの場合、母文化の中で教育を受けています。そのため、全く経験したことのない日本の学校に子どもを託す不安は、想像もつかないほど大きいものがあります。

3. 「聞く・話す」から「読む・書く」への大きな壁

日本語には、日々の暮らしの中で会得する「生活言語」と、教科学習の中で習得する「学習言語」があり、子どもはその両方を同時に覚えねばなりません。しかし実際には、「聞く・話す」力は短期間で身についても、「読む・書く」力は長い時間と多大な努力を必要とします。会話力と学力は必ずしも連動しません。

4. 親子間に生じる理解度の差

子どもの日本語力が向上して日本文化への適応が進むと、保護者が持つ母文化との間に溝ができます。その溝が深くなるにつれ親と子の意思疎通が難しくなっていきます。



5. 子どもはストレスと闘っています

親によって日本に連れてこられた子どもは、「日本で生活すること」をなかなか受け入れられません。それに加え、言いたいことを上手に伝えられないことから来るストレスは、非常に大きいものがあります。その子に関わるすべての人たちは、子どもが常にストレスと闘っていることを知ってあげましょう。

クラスの「一員」にするために

・・・こんな事から始めましょう

◇日本の学校生活を少しずつ理解させる

日本の慣習に基づく、いわゆる「生活指導」の事柄は、日本人には当たり前でも他の人たちにはそうではないこともあります。ピアスなどは、宗教上「装飾品ではない」と考えるところもあります。学校では、徐々に日本の学校生活に慣れていくよう本人と保護者に説明し、協力を求めることが大切です。

◇「日本語学習」と「教科学習」の二足のわらじを履く子ども

「日本語」が不自由な子どもは、教科学習に入る前に「日本語学習」が必要です。特に来日当初は「日本語学習」に重点を置くことが不可欠です。子どもは、来日後数年を経ても、一方で「日本語」を学び、もう一方で「教科」を学ぶという、いわば「二足のわらじ」を履くことが求められます。大変な過程を歩む子どもにとって、先生や周囲の応援は何よりの力です。

◇母文化について教師が理解を示す

子どもの母文化(言語を含む)について、教師がそれを理解しようとする姿勢を見せることは、本人やクラスの子どもの安心させ、子どもたちそれぞれが心を開くきっかけとなります。

◇通訳の活用

学校の規則は守るべきものとして、最初にしっかりと伝える必要があります。そのため、通訳などを活用して、保護者と学校との円滑なコミュニケーションを図り、双方の不安を和らげることが大切です。

◇子どもが何を理解しているか見極める

当然のことながら、国によってカリキュラムも教え方も違います。子どもが何を理解し、何を理解していないのかを探り、小学校ではどこから勉強をスタートさせるのか、中学校ではどのように支援できるのかを見極めることが重要です。

このような考え方を元に、つづきMYプラザでは、どのような支援ができるか教職員の皆さんと一緒に考えていきたいと思っております。